
ししのぶタイム

ヨッキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ししのぶタイム

【Nコード】

N7958T

【作者名】

ヨッキ

【あらすじ】

スーパーししのぶで働く木之宮と倉杉は、お互い仲は良いものの、年の違いもあって恋愛対象としては全く見ていない。そんな二人が徐々に惹かれ合う切ないラブストーリー！。

第1話：歳の差

今、カラオケ店に二人の男女がいる。

男は【木之宮^{きのみや}】、女は【倉杉^{くらすぎ}】。二人は別に恋人同士という訳でもなく、【ししのぶ】というスーパ―のただのバイト仲間だ。

今日はそのししのぶの親睦会が行われる日なのだが、大半のメンバーが遅れて来る為、数人のメンバーでカラオケで時間を潰す事になった。

「…なんすか？」

二十歳に成り立ての木之宮が年上の倉杉に向かって、生意気な口調で尋ねた。それもそのはず、倉杉は曲を検索する木之宮の顔をじっと見ていた。

「別に…。」

倉杉はそう言っつて顔を反らした。そして目だけを再び木之宮に戻した。

「なら見ないでくださいよ。気が散るじゃないすか。」

一応敬語だが、木之宮の口調はやはり生意気さを含んだ。

「あら！気が散るのは私のせいじゃないわ！木之宮くんが私を意識し過ぎなのよ！」

木之宮はため息を吐いた。

「はいはい、そつすか。」

そう言つて立ち上がり、木之宮は堪らず部屋を出た。

部屋に取り残された倉杉もまた細いため息をついた。

誤解を避ける為に先に言つておくが、倉杉は別に木之宮に恋愛感情を抱いている訳ではない。ただ倉杉は、先日同じパートのおばさんから聞いた話しが気になっていた。

「木之宮くんつて、倉杉さんの事好きらしいわよ〜！」

噂好きの丸川に堂々とそう言われ、倉杉は目を丸くした。

「え〜まさか〜！だって私の方が六つも年上なんですよ？」

何を馬鹿な。と倉杉が笑つてそう言つた後、もう一人の噂好きのおばさん、橋本が割つて入った。

「あら！でもあの子、前に西崎くんに話してたらしいわよ？倉杉さんみたいな人が好みだつて〜！」

「アハハ…。それつてただ好みつてだけで私を好きつて訳じゃないんじゃない〜。」

そう言つて倉杉は否定してみたが、おばさんたちは引き下がらなかつた。

「あら、恋のキツカケなんてそんな些細なもんよ！条件が合えば直ぐなんだから！」

「そうよ直ぐよ！それに恋に歳なんて関係ないわよ！ホホホ！」

丸川と橋本の連携の取れた冷やかしに倉杉はただたじろぐしかなかった。

そして、カラオケ店の一室で、倉杉は呟いた。

「直ぐって何がよ？」

一方、木之宮は部屋の外で憂鬱そうにため息をついていた。そしてちょうどその時、一緒にカラオケに来ていたバイトの先輩の西崎と鉢合わせになった。

「おお木之宮、お待たせ！」

悪いな、せつかくの親睦会なのに集まり悪くて。丸川さんと橋本さんは後一時間くらいで着くってさ！」

ケータイ片手に西崎がそう言った。

「そつすか…。」

木之宮はそれだけ言うのと再びため息をついた。

「てか俺、今すごく気が重いですけど…。」

やっぱ、初っ端カラオケって無謀だったんじゃないすかね？倉杉さん何も歌わないし、部屋で二人無言っすよ？」

それを聞いて西崎がケラケラと笑った。

「何言っただよせつかく二人切りにしてあげたのに。おまえ倉杉さんみたいのがタイプなんだろ？もつと頑張れよ！」

「ちよっ！だからそれ違うって言ってるじゃ…！」

否定する間もなく、西崎は部屋の扉を開いた。すると、中から先程までは無かった音楽が聞こえて来た。

そこには一人で歌う倉杉の姿があった。

倉杉が木之宮と西崎に気付くと、「あ」と声を上げ、それがマイクにこだました。

「え」と、場の空気温めておきました。後よろしくお願いします…。

「

倉杉が曲を切りながら照れ臭そうにそう言つと、木之宮は涼しげな表情で「一人で？」とツツコミを入れ、西崎は「プププ」と笑った。

「良いと思うけどな倉杉さん！」

歩いている途中、西崎が突然言った。

「前言ってたおまえのタイプって、年上でおしとやかで、大人になつても汚れを知らなそうな人だろ？倉杉さんそのものじゃん！」

「そ、そうですね、さすがに六つも離れてると…。」

「何言つてんだよ！倉杉さん見た目すごく若いし、可愛いじゃん！俺も彼女いなかったら絶対好きになつてたぜ？」

倉杉は合流した丸川と橋本と楽しげに話していた。木之宮たちとは離れて歩いているが、自分たちの話しが聞かれているんじゃないか

と木之宮はヒヤヒヤしながら後方をチラチラ見た。

「正直…前に西崎さんに『おまえのタイプって倉杉さんじゃないか』って言われた時、ハツとした自分がいたんです。それで一晩中考えてみて分かりました。あ、やっぱり違ってた…。」

西崎は木之宮の話を黙って聞いている。

「倉杉さんは確かに俺のタイプかも知れないけど、所詮ただのバイト仲間なんです。たまに職場で話して、冗談言い合って、笑って…。ただそれだけの人なんです。ただそれだけの人と恋に落ちるなんて、変な話です。」

木之宮がそう言い終わると、西崎は腕を自分の頭の後ろで組み、目を閉じた。

「ふーん、なるほどね。どうりで…。」

木之宮ははてなマークを浮かべた。

「人が人を好きになると二つの道が出来る。恋に落ちるか…怖くなるかだ。」

どうりで倉杉さんの前で笑わなくなったと思ったよ。おまえ。」

スタスタ歩く西崎の背中を追いながら、木之宮は視線を背けた。

親睦会の名の通り、居酒屋で親睦を深めた後、主催者の西崎は上機嫌で言った。

「お疲れ様でしたー！」

夜もふけ、時間は9時を回っていた。西崎は丸川と橋本に別れの挨拶している。

「今日はちよつと人も集まらなくてボロボロでしたね。」

「あら、私たちは三人で充分楽しんだわよ？ねえ？」

丸川がそう皮肉を言うと、橋本が「ホホホ」と笑って「またやりましょーね」と西崎の肩を叩いた。

その様子を見ていた木之宮に倉杉が話し掛けて来た。

「木之宮くん。大丈夫？」

今日…ていうか、最近元気無いみたいだけど？」

倉杉の頬はお酒を飲んでほのかに赤く染まっている。

「…そんな事ないですよ。元気です。」

ニツコリ笑いながら木之宮はそう言った。

倉杉はその笑顔に一瞬違和感のような物を感じたが、すぐに考えるのを止めて言った。

「そう、良かった。それじゃあまた職場でね！」

「はい、お疲れ様でした！」

木之宮がそう言うと、倉杉は手を振って歩き始めた。

（やっぱり私の事好きだなんてただの噂ね。だって完全に愛想笑いだったもん。）

そんな事を考え、倉杉の気持ちは少しすっきりしたようだった。

そして木之宮はそんな倉杉の背中を目で追い、倉杉がふと向けた視線の先を見逃さなかった。

そこには丸川と橋本と話している西崎の姿があった。

「ありがとうございますー！！」と、元気に挨拶する倉杉の声が店内に響いた。

「お次お待ちのお客様どうぞー！！」

倉杉の細い身体に不釣り合いな大音量の声は、野菜コーナーで品出ししている木之宮の耳にも届いた。

いつもの光景にも関わらず、木之宮はしばしば手を止め、倉杉を見た。

常にテンションの低い木之宮にとって、倉杉のテンションの高さは尊敬に値した。

あの力の源はどこから来るんだろう？あの元気を少しでも分けて貰えたら、俺も日々楽しく生きて行けるのに。どっかに元気を吸い取る装置ないかな？

そんな事を真面目に考えていた。

休憩中、木之宮は店内で買ったおにぎりを一人で食べていた。

そんな時、倉杉が休憩室に入ってきた。木之宮はおにぎりを頬張ろうと、大きく開けていた口で思わず「あ」と声を上げた。それを聞いて倉杉は怪訝な表情を浮かべた。

「『あ』って何よ？」

「あ、いえ、お疲れ様です。」

「木之宮くんもお昼か…。」

あ、そうだ！丸川さんからおまんじゅう貰ったんだけど、食べる？」

「あ、ちょうど甘いモンが欲しかったんです。頂きます。」

「よしきた！」

ちよつと待つて、一個しかないから半分こにするね！」

倉杉は木之宮が出した手の上に、「はい！」と器用に剥がしたおまんじゅうの皮を乗せた。

「召し上がれ！」

倉杉はそう言つて、テヘツと舌を出したすごく良い笑顔を見せた。

「あのこれ…。」

半分個という言葉の限界をすっかり越えちゃってるんですけど？」

「皮に含まれている黒糖の甘味を楽しんで貰いたくて！」

そう言いながら倉杉は、半分とは程遠い大部分のおまんじゅうをモグモグと食べ始めた。

仕方なしに木之宮はペラペラの皮を口の中に放り込んだ。
しかし木之宮は驚く。確かに黒糖の甘味が濃厚に口の中に広がる。
普通の食べ方をしていたらこんな感激は味わえなかったに違いない。
これはこれで悪くないと木之宮は思った。

「ねえ木之宮くん。」

「はい？」

木之宮が顔を上げると倉杉は真剣な顔で言った。

「ここ笑うところ。」

木之宮も思わず真顔になった。

そして、ポツポツと休憩室の窓を打ち付ける雨音が聞こえて来た。
それは次第に強くなり、町中を包み込む豪雨となった。

「雨：降ってきましたね。」

木之宮は静かにそう呟いた。

仕事が終わわり、木之宮はスーパーの裏口から空を見ていた。雨が止
む気配も無く、傘を持たない木之宮は途方に暮れていた。

「あちゃーまだ降ってるかー！」

同じく勤務を終えた倉杉がそう言いながら現れた。

「しょーがない！」

傘が無くて困ってる木之宮くんをほっというて帰るか！」

そう言つて倉杉は傘を勢いよく開き、脇目も振らずスタスタと歩いて行つた。木之宮はそれを真顔で見ている。

「あれ？傘無いの？」

同じく勤務を終えた西崎が後ろから木之宮に話しかけた。

「うわっ！ビックリした！」

そんな言葉を掛けてくれる人がいたなんて！」

「これ使いなよ。俺折りたたみ傘も持つてるから。」

そう言つて西崎は手に持っていた傘を木之宮に渡した。
木之宮は目に滲む水滴を雨のせいにした。

「あの…倉杉さんつて俺になんか冷たくないですか？」

突然何を言つのかと、西崎は笑つた。

「ハハハ、えーそうかな？」

んーそれは多分、倉杉さんが木之宮に心を許してるからだと思うよ？」

意外な答えに木之宮は目を丸くした。

「倉杉さんつてさ、ほら、みんなに優しいじゃん。わがままとか鼻に掛けた事言わないし、いつも周りに合わせて発言や行動してるでしょ？」

言われてみれば確かに。木之宮はそう思った。

「木之宮が前に話したような倉杉さんの奇行なんて、俺や他の仲間には絶対見せないもん。」

それってきつと、倉杉さんにとって木之宮が特別だからなんだよ。」

木之宮は喉の奥で「うーん」と唸り声を上げた。

「あれ？嬉しくないの？」

「いや、嬉しいとかはないですよもちろん……。
ただ……それは違うと思います。」

特別なんて良いもんじゃなくて、ただ倉杉さんは俺の事弟みたいに思ってるだけなんじゃないですかね？」

「ダメだなー。そんな風に考えてたら何も進展しないぞ？ハハハ！」

「進展させる気なんてないですって……。」

木之宮はうんざりした顔でため息をついた。

「それじゃ俺行くわ！お疲れ！」

そう言つて西崎は雨の中走った。

「お疲れさ……つて、あれ？」

西崎さん傘は！？」

「折りたたみ傘入れてた鞆忘れたー！まあ俺ん家すぐ近くだから！」

そう明るく言って、西崎は去って行った。

「…なんであんな良い人なんだろう？西崎さんって…。」

木之宮は西崎の人柄に小さく嫉妬してそう呟いた。

「あれ？傘あるじゃない！」

突然の声に木之宮は驚いた。倉杉が戻って来たのだ。その手には傘がもう一本握られていた。

「その傘…もしかして俺に？」

「…しょうがないからコンビニで買って来たのよ。本当にあのまま帰るとでも思った？」

「思っていました。」

木之宮が素直にそう言つと、倉杉は「もう、ホント冗談が通じないんだから」と言つて頬っぺを膨らませた。

「…でもちよつと遅かつたっすね。ついさっき西崎さんにこの傘貸して貰つたんす。」

当の西崎さんは傘もささずに去って行きましたけどね。」

「え！？」と倉杉が言つた後、木之宮は遠くを指差した。雨の中走る西崎の後ろ姿が、まだ見えた。すると、倉杉は突然走り出して西崎を追った。

木之宮は、なんとなくこうなる事を予想していた…。

—つづく—

第2話：同い年

次の日、木之宮は倉杉に尋ねた。

「昨日あの後、西崎さんに傘渡せたんですか？」

「…渡せなかった。西崎くん走るの早過ぎ…。」

そう言つて、倉杉はため息をついた。

「ていうか、なんで私が傘渡しに走つてんのよ！傘借りたの木之宮くんなんだから、木之宮くんが西崎くんに返して、私が持ってきたの使えば良かったじゃない！」

今更それを言うか、と木之宮は思った。

「西崎くん、風邪引いてなければ良いけど…。」

「そつすね。今日は公休で状況分からないし…。」

倉杉が落ち込む時は、たいてい西崎の事に関してだ。

木之宮は何度となく、そんな話を聞いてきた。きっと本人は、自分の気持ちが悪くはないと思つてゐるに違いない。

木之宮はそんな話を聞く度不思議に思つていた。

西崎には彼女がいる。好きな人がいる人を好きになつて何の得があるんだろう？

どうしてその気持ちを抑えようとしなないんだろう？
好きになつても傷付くのは自分なのに…。

次の日、西崎は体調を崩した様子もなく、元気に出勤してきた。
更衣室で木之宮がこの前のお礼を言って傘を返すと、西崎は傘を受け取りながら「またいつでもどうぞ」と笑って言った。

「そうだ！今度さ、彼女と遊園地行くんだけど、良かったらおまえも来ない？」

「え！？彼女さんとデートですよね！？なんで俺が！！？」

木之宮は驚いて声が裏返った。

「そうなんだけど、貰ったチケットが二枚余っててさ、せっかくだからダブルデートしようかと思って！」

「…でも俺、誘う人なんていないっすよ？」

「倉杉さん誘えば良いじゃん！」

本気で言ってるのかこの人？鈍感さもここまで来るとさすがに怒りを覚える。そう木之宮は思った。

数日後、木之宮と西崎と西崎の彼女の^{にいじま}新島、そして倉杉が遊園地の前に集まった。

「まさか来るとは思わなかったです。」

木之宮が呆れてそう言つと、倉杉がそわそわと落ち着かない様子で答えた。

「な、何が？」

ちようと遊園地行きたいなーって思ってたし、断る理由なんてないじゃない！」

そう言いながら、倉杉は西崎と新島をチラチラ見ている。
木之宮は思わずため息をついた。

「初めましてー！」

そう元気に新島が挨拶して来た。
西崎が新島を紹介し、木之宮と倉杉が自己紹介した。
そして西崎が合図した。

「さあ、とりあえず中に入ろうか！」

遊園地内は平日という事もあって、かなり空いている。一日限りのパスポートを有意義に使うにはもってこいだ。
四人は様々な乗り物に乗った。メリーゴーランドやゴーカートやテイクアップ、最初は肩慣らしのつもりで軽目の乗り物に乗り、本番とばかりにジェットコースターの前まで辿り着いた。

「あ、俺ちよつと休みます。」

突然の木之宮の発言に、一同は振り返った。

「もしかして…怖いのか？」

西崎が尋ねた。

「え？いや、違いますよ？

ただちよつと疲れたから、ジュースでも飲もうかなって…。

あ、俺の事は良いんで乗って来てください。」

木之宮を除く三人は顔を見合わせた。すると、西崎はニヤリと笑って言った。

「木之宮、お姫様だっこ好き？」

「え？」

突然西崎は見掛けによらない豪腕を発揮し、木之宮をひょいと胸に抱き抱えた。慌てる木之宮をよそに、その足はジェットコースターに近付いていく。

「これ乗ったらみんなで休憩するから！」

「え、いや、俺ホント良いんで！ちよつ、まつ…！！
い、いやあ……！！！！！」

木之宮の女のような叫び声が、乗り場に響いた。

数分後、木之宮は一人トイレに閉じこもった。

外ではなかなか出てこない木之宮を心配していた。

「なんか悪い事しちゃったな…。」

「もう、あんたが無理させるから…！」

反省した様子の西崎に追い打ちをかけるように新島が言った。

「俺ちよつと飲み物買ってくるよ。」

そう言つて西崎が離れると、その場に倉杉と新島が取り残された。なんとなく気まずくて倉杉が何も喋らないでいると、新島が先に口を開いた。

「ホントロクな事しないよねあいつ。職場でもみんなに迷惑掛けてるでしょ？」

「そ、そんな事ないよ！一個下なのにしっかりしてるし、楽しくてすごく良い人だよ！」

倉杉の声がワントーン上がった。そんな自分に気付き、倉杉は「あ、いや…」と微妙な間を置いた。

新島は怪訝な表情を浮かべ、倉杉をじつと見た。

「倉杉さんつてもしかして…… 26歳？」

「え？そ、そうだけど…。」

新島の突然の名探偵ぶりに、倉杉はたじろいだ。

「えー！見えないッ！てつきりあたしと同じ二十歳くらいかと思つてたのに！」

「アハハ…それはいくらなんでも…。」

でもそうすると、新島さんは木之宮くんと同い年なんだね。」

「木之宮くんって、あのトイレで生と死の境をさ迷つてる…？」

「…うん。」

倉杉と新島は男子トイレに向かつて悲しげな視線を送った。

「…でも、木之宮くんってなんか可愛いですね。」

「え？」

突然の新島の感想に倉杉は戸惑った。弟のような木之宮の事をそんな風に思う女性がいるなんて思わなかったのだ。

「まあ、生意気だけどね…。」

倉杉はそう言った。

木之宮は少し落ち着きを取り戻し、トイレから出て来た。だけどその顔はげっそりと痩せこけ、まるで魂を吸われてしまったかのようだ。

四人はベンチに座り、西崎が買ってきたジュースを飲んだ。

ベンチは二つあり、西崎と新島、倉杉と木之宮のペアに分かれて座っている。

西崎と新島は何やら楽しげに会話をしていた。それに引き換え、倉杉と木之宮のテンションはすっかり落ちている。

木之宮は胃に負担を架けないよう、冷えたオレンジジュースをゆっくりとストローで吸い上げた。

「ああ…まだ頭がクラクラする…。」

「木之宮くんって絶叫マシン苦手だったんだね？」

倉杉がそう尋ねると、男のプライドが許さないのか、木之宮は反論した。

「べ、別に怖いって訳じゃないんすよ？ただ、Gに弱いだけです…。」

それ以上木之宮は何も言わなかった。どっちにしろ苦手な事には変わりないと自分で気付いたのだ。

「あ、知ってる？」

乗り物酔いする人は、頭の上に本を乗せてバランス取ると良いらしいわよ？」

そう言いながら倉杉はバランスを取るジェスチャーをしてみせた。

「はあ…じゃあ今度試してみます。」

それだけ言っと、木之宮は再びジュースに口をつけた。まだ気分が良くない。

「ああ、帰りたい…。」

木之宮が言った。

すると倉杉は、仲良さそうに話す西崎と新島の方をチラリと見て、「私も…」と俯いて小さく言った。

木之宮はそれを何となく聞こえなかったフリをした。

「あ、聞いた？新島さんって木之宮くんと同じ年なんだって。」

「そうなんすか？西崎さんもやりますね。」

モヤモヤした気持ちを振り払うように明るく話そうとする倉杉に合わせて、木之宮も声をワントーン上げて言った。

「木之宮くんの事…可愛いつて言ってたよ？」

ちょうど口に含んでたジュースが勢いよくしぶきを上げた。
木之宮は咳払いして、冷静を装って言った。

「そっすか…。」

しかしその顔は真っ赤になっている。

「何喜んでるのよ？」

ニタニタしながら倉杉が言うと、木之宮は慌てた。

「べ、別に喜んでる訳じゃ…！」

まあ嬉しいすけど、本人も本気で言ってる訳じゃないですよきっと。
「

そう言うって向こう側のベンチを見た。西崎の彼女である新島は、よく見ると目がパッチリと大きく、口元が三日月のように広がった可愛らしい顔立ちをしている。彼女の活発な性格が窺えるジニムのミニスカートから突き出た足やＴシャツに浮き出る胸のラインは、まるでグラビアアイドルのようなプロポーションを誇っていた。

そんな新島が木之宮の視線に気付いて微笑んだ。慌てて木之宮は顔を背けた。

その様子を見ていた倉杉が、ニヤニヤしながら木之宮の耳元で囁いた。

「奪っちゃいなよ!」

いつもの冗談のつもりだろうが、倉杉の内に秘めた想いを知ってる
とシヤレに聞こえなかった。

「それはこっちの台詞ですよ。」

木之宮がそう小さく呟くと、倉杉は聞こえなかったのか、はてなマ
ークを浮かべた。

休憩を終え、四人は再び遊園地を周り出した。木之宮を気遣ってな
るべくGのかからないアトラクションを選んだ。おかげで木之宮の
体調もすっかり良くなった。

「今度これなんてどう?」

西崎が提案したのはお化け屋敷だ。しかもただのお化け屋敷じゃな
い。この遊園地の最大の売りでもある地下施設をテーマにしたゾン
ビだらけのアトラクションだ。

「あたしこついうの苦手かも…。」

新島がそう言って後ずさりした。

「あれ?おまえ怖いのが苦手だったけ?

まあさっきの事もあるし、無理はさせないけど…。」

西崎がそう言うと、新島は胸の辺りで拳を握り締め、「でもせっかくだから入ってみるよ！待ってるのも退屈だし！」と自分を奮い立たせるように言った。

だがやはり怖いのかその足取りは重く、並んでいる列で西崎、倉杉、木之宮という順でみんなについて行く形で新島が後ろの方を歩いた。西崎と倉杉が怖い物知らずで意気揚々としているのに対し、新島は入る前から怯えている。さすがに木之宮は気の毒になった。

「あ、お客様、入場は2名様づつとなっております。」

みんなで一斉に入ろうとすると、突然スタッフにそう言われた。流れるに前を歩いていった西崎と倉杉が先に入る事になった。

倉杉は思いもしない展開に戸惑った表情をして、後ろをチラチラと見ていた。

「じゃあまた後でな！」

そう言つて暗い地下へと続くトンネルの中に西崎と倉杉が消えていくと、木之宮は急に居心地の悪さに襲われた。きつと新島も同じような想いをしてるんじゃないかと思った。

「それでは次の方どうぞ！」

5分後、そう言つてスタッフが案内した。

木之宮と新島は無言のまま、中へと入って行った。

しかし、その沈黙はすぐに叫び声へと変わる。トンネルを歩いていると、カクカクと動きの鈍いゾンビが現れた。ゾンビは床に伏せていて、こちらを窺っている。

そこを通らないと先には進めない。木之宮は足元のゾンビに不気味

さを感じながらも、思い切ってそこを通ろうとした。

「待って！」

そう言つて新島は木之宮の腕を掴んだ。木之宮は驚いて新島を見た。

「ねえ、腕組んでて良い？」

震えた声で新島が言った。怖がっている女の子を拒む訳にもいかず、木之宮は頷いた。

そして、二人はゾンビが這うトンネルを通った。すると案の定そのゾンビたちは動き始め、歩伏前進で追つて来た。その異様な光景にまず先に新島が悲鳴を上げた。

「キャーーーー！！！」

悲鳴と共に新島は木之宮の腕を強く握り絞めた。

「痛ーーーー！！痛い痛いッ！！！」

木之宮も別の意味で悲鳴を上げた。そして新島は腕を掴んだまま、木之宮を引きずるように走り出した。

「ちよつ！新島さん待つ……！
もげる！腕がもげちゃう！！
イタタタタッ……！！！」

新島は逃げるのに夢中で木之宮の悲痛な叫びが聞こえないようだ。木之宮の腕は逆方向に曲がっている。その光景にゾンビたちでさえ怯えた。

一方、西崎と倉杉はあまり怖がる様子はなく、難無く進んで行く。

「今のゾンビ、腕無かったですね。」

「アハハ、多分お腹の所に隠してるんじゃない？
このお化け屋敷凝ってて面白いね。」

「てかゾンビなのにお化け屋敷って！アハハ！」

「こういう所ってお客さんに触れるの禁止だから、多少怖くても結局安全なのよね。」

「ホラー映画と同じですね。
最近何観ても面白くないんですよ。なんか見飽きちゃって……。」

「あ、だったらフランスのホラー観てみたら？あれはかなりエグいわよ！」

「へ〜！面白そうすね！今度観てみよう！！！」

お化け屋敷でホラー映画の話をするのはこの二人ぐらいなものだろうか。周りのゾンビたちが必死で驚かせようとしてるにも関わらず、可哀相に無反応だ。

「でもこれが映画の中なら、俺たち即死ですね。あまりに危機感なさ過ぎつすもん。」

「アハハ、言ってる。」

ゾンビの覆面の下は、恐らく涙で水浸しだろう。

一方、木之宮と新島はようやく足を止めた。走っている最中ゾンビが幾度となく怖がらせようとしたが、放つといても怖がつてる状況だし、あまりのスピードに追い付けなかった。

困った係員が「走ると危険ですので、走らないでください！」というアナウンスを流し、新島はようやく我を取り戻したのだ。

「ハアハア…ああ怖い。やっぱり入るんじゃないかな…。」

「なんか、さっき俺の腕が逆方向に曲がった気がしたんだけど…大丈夫かなこれ…？」

木之宮の腕にはズキズキと痛みが走っていたが、無事なようだ。なによりもげてなかった事に木之宮は安心した。

木之宮たちは地下施設の入口に辿り着いていた。まだ先があるのかと新島はため息をついたが、先に進まない事には出られない。入口は内側から壊されたような大きく穴の空いた扉になっていて、中からはおぞましい呻き声が聞こえた。

「ねえ腕…。」

「遠慮します。」

木之宮は間髪入れず断ると、颯爽と扉を潜り抜けた。

「ま、待ってよー!」

後に続くように新島が潜り抜けると、新島はやはり怖いのか、木之宮の服を掴んで後ろに付いた。

「なんか、木之宮くんって遅しいね。怖くないの？」

「そりゃあ怖くない事はないですけど…そこまでじゃ。」

「そうなんだ？」

でも木之宮くんあたしの事バカにしないから、なんか嬉しいな。あいつなんて酷いんだよ。こういう所来ると、怖がつてるあたしを見て笑ってるの！」

（西崎さんらしい）と木之宮は思った。

「なんか…木之宮くんといると安心する。なんでだろう…？」

そう言つて新島は木之宮の背中に触れた。そつと添えられた指の感触に木之宮は思わず顔を赤らめた。

「に、西崎さんだつて充分頼りになるんじゃないすか？俺、西崎さんと話してると結構安心しますよ！」

木之宮はそう言つて変な雰囲気壊そうとした。幸いにも薄暗がりの中では顔の赤らみも悟られない。

「あいつの事好き？」

「まあ、好きですよ。」

「ホモなの？」

「違います…。」

木之宮がうんざりした顔で言うと、新島はクスクス笑った。

「…あたしは正直言つとそんなに好きじゃない。」

「…は？」

「あたしさ、あいつと別れようと思ってるんだ。やっぱり歳が離れてるせいか、上手く行かない事も多くて…。」

木之宮は一瞬新島が何を言ったのか理解出来なかった。そんな事をこんな時に話すなんて思わなかったからだ。

「そ、それは…なんと云つて良いのか…。」

木之宮は混乱している。いつその話をゾンビの出現で終わらせて欲しかったが、こんな時に限ってゾンビは現れない。新島の話はまだ続く。

「あのさ…」

もしあたしたちが別れたら…

木之宮くんあたしと…………」

（今日会ったばかりの俺に何を言い出すんだこいつは）と慌てた時、前方の方で叫び声が聞こえた。

「に、逃げる二人とも…!!」

そう言って走って来るのは先に行ってたはずの西崎と倉杉だ。その後ろからは大量のゾンビが物凄い勢いで追ってくる。

どつりで木之宮たちの所にゾンビが現れなくなったはず、ゾンビたちは全く怖がらない西崎と倉杉にプライドを賭けて挑戦しようと集結していたのだ。

ゾンビの本気だ。

さすがに全員悲鳴を上げた。

—つづく—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7958t/>

ししのぶタイム

2011年10月5日22時00分発行